

探訪 北の風景 55

ローマ遺跡を彷彿 北防波堤ドーム

稚内市稚内港

青木和弘

稚内港に、古代ローマの神殿を彷彿（ほうふつ）させる防波堤がある。「稚内港北防波堤ドーム」と呼ばれている。

この防波堤ができたのは1936年（昭和11年）のこと。宗谷本線から樺太への稚泊（ちはく）連絡船に乗り換える旅客や貨物を、強烈な風雪や波しぶきから守るために造られた。鉄筋コンクリート製で高さ11・4メートル、幅15・2メートル、延長427メートルある。

当時、連絡船が発着するこの埠頭まで線路が延び、ドームと栈橋の間に「稚内栈橋駅」が設置されていた。1945年（昭和20年）、終戦で樺太

がソ連（現ロシア）領となり、樺太航路が廃止されるまで、多くの旅客や荷貨物扱いで活気に満ちていた。

戦後は石炭置き場になり、栈橋駅舎は1972年、老朽化のため取り壊され、1976年、防波堤ドームも劣化のため解体することになったが、保存を求める市民の熱心な働きかけで、原型を忠実に再現することになり、1980年、復元工事が完成した。

この防波堤ドームの設計者は26歳の北海道庁技師・土谷実だが、実はもう一人、土谷を抜擢した重要な人物がいた。網走と稚内の築港事務所長を兼務した技術者、平尾俊雄だ。平尾は若い土谷の才能を見抜き、稚内港北防波堤の設計にあたり、防波堤の胸壁を越える波と、海中に打設した、木くいの腐食の観測を命じた。平尾は、稚内特有の強烈な風と高波は高さ7メートルの壁を簡単に越える結果を見て、防波堤に屋根を設けることと、コンクリートくいを使うことを決断する。

設計にあたった土谷は途方に暮れたという。底経験がなかったからだ。しかし、大学の卒業論文でコンクリートアーチ橋を手掛け、外国文献をひもといいた経験が役に立った。大学の講義で強く印象に残ったギリシャ・ローマ建築の講義資料を持っていたことも幸いした。古代ローマの影響を感じ



ドームの回廊は427メートルもある。冬季の風波を受け止め、乗降客や列車、貨物などを守る頼もしい防波堤だったことがよく分かる

取れるドームの外観はこうして生まれたという。後年、土谷氏は、デザインは「怖いもの知らず」が幸いしたが、後で「型枠」に泣かされました。もし、いっばしの港湾屋だったら、こんな大変なデザインにすることはなかったでしょう、と語っている。

今年2018年3月に開設された稚内市樺太記念館（稚内市港1の6の28 稚内副港市場2階）に、稚内港北防波堤ドームについての詳しい展示があり、栈橋駅の模型もある。

樺太は、終戦間際のソ連参戦で戦場となり、大混乱の緊急引き揚げや、シベリヤ抑留、自決した電話交換手「九人の乙女」の悲話など、悲しい歴史が残るが、そんな史実も防波堤ドームは語り継いでいく。





ローマ遺跡を思わせる柱は70本。大胆なドームの屋根を設けた防波堤は、型枠設計に大変な苦勞を強いられたという。かつては、夏になるとサイクリングの若者がこの回廊でキャンプをしたが、いまは禁止になっている



ドームの脇から堤防に登って見下ろすと、防波堤で
あることがよく分かる

市内を見下ろし、遠くサハリンを望むことができ、
ける稚内公園には、引き上げの悲劇を物語る樺太
島民慰霊碑「氷雪の門」像や、「九人の乙女碑」
がある。

現在、稚内港北防波堤ドームは、稚内の歴史を
語る第一級の観光施設となり、近くに公園も整備
され、イベント会場としても利用されている。稚
内駅から栈橋駅に続く線路などは撤去されたが、
防波堤としての機能は維持されて、その後も利尻
島や礼文島へのフェリー航路など、多くの船が発
着する稚内港を守り続けている。

意匠の優れたインフラは、地域アイデンティ
ティーに少しずつ影響を与え、文化形成にひと役
をかうようになった。日本土木学会選奨土木遺産
に指定され、北海道遺産にもなっている。